

教育研究業績書

令和 5 年 5 月 11 日

氏名 瀬尾 誠



教育上の能力に関する事項

事項	年 月	概要
1 教育方法の実践例		
(1) 講義資料や学生実習の実験結果の Web 掲載	2005 年 4 月 ～現在	大学での講義や実験実習において、講義資料のファイルを web 掲載し、資料を紛失した学生や欠席した学生に迅速に対応できるようにし、特別欠席などの学生が後日受講できるようにオンデマンド教材も Web 掲載している。また、実験実習での菌培養結果や電気泳動像の写真や他班の実験データ(生データ)などを Web 掲載し、自班のデータと比較したい学生がいた場合に、必要なファイルが入手できるようにしている。
(2) サイエンスカフェ(学生とのコミュニケーションをとれる場所)の設置	2013 年 4 月 ～2015 年 3 月	埼玉医科大学在職時に、学生が教員とコミュニケーションを取りやすいように、講義の合間や夕方などに、学生が自由に入出りできる場所を所属教室内に設置した。定期試験期間以外の期間にも自習や質問に来訪してくる学生だけでなく、単純に教員と会話しに訪れてくる学生もおり、学生と教員の関係性をより円滑にする役割を果たした。
(3) 地域の健康に関するイベントでのフィールドワークの実践	2015 年 4 月 ～2020 年 3 月	福山市ならびに近隣地域での健康に関するイベントにブースを出し、血圧、血糖値や肺年齢の測定を行い、疾病発症の予防に関する啓発活動を行なっている。また当該活動を授業に組み込み、学生がフィールドワークとして参加するアクティブラーニングを実践した。
2 作成した教科書・教材		
(1) パワーポイントによる講義資料の作成	2005 年 4 月 ～現在	大学や看護専門学校などでの講義資料をパワーポイントで作成し、視覚的にも学生に分かりやすい資料を作成するために年度毎に更新作業を行いブラッシュアップに努めている。また、教科書に掲載されていない図表を補足することで、講義内容を広く、深くして学生に十分な専門知識を修得できるよう努めている。
(2) 学生実習の実習書改訂	2005 年 4 月 ～2020 年 3 月	埼玉医科大学在職時には、医学部 1 年生および 2 年生を対象とした細胞生物学実習を行い、細胞下分画や酵素活性を指標にした細胞内タンパク質局在、SDS-PAGE、ウェスタンブロッティングなどの内容を改訂した。平成 23 年度に生化学教室と分子生物学教室が合併し、遺伝子抽出、PCR、制限酵素処理、大腸菌を用いたタンパク質発現など、分子生物学的手法を用いた実習項目も併せて実習書の改訂を行った。 福山大学においては、残留塩素の測定や食品添加物の定量

様式第 4 号（教員個人に関する書類）

		<p>など主に衛生薬学系の実習項目を担当している。また今後疾病の予防とセルフメディケーションの必要性が高まる観点から、自己血糖測定の商品を導入した。内容としては、通常の炭酸飲料とゼロカロリーの炭酸飲料を学生に実際に摂取させ、摂取前後の血糖値変動の測定を行うことで、食品添加物としての甘味料の特性を理解させるのであるが、学生からも分かりやすいと高い評価を得た。</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>(1) 福山大学での教員実績評価の結果</p>	<p>2015年4月～2020年3月</p>	<p>福山大学では、毎年専任教員の実績評価として、教育・指導上の工夫、研究活動、大学運営への貢献、社会連携・地域貢献活動の4項目の評価が行なわれている。自己評価では平均4点前後（5点満点）で、最終評価は不明であるが、平成28年度の最終実績評価では高い評価を受けた。</p>
<p>(2) 福山大学での学生による授業評価の結果</p>	<p>2015年4月～2020年3月</p>	<p>福山大学での学生による授業評価では、授業内容に関する項目の平均点として毎年4.3点以上（5点満点）と高い評価を受けた。</p>
<p>(3) 甲子園大学での学生による授業評価の結果</p>	<p>2020年4月～現在</p>	<p>甲子園大学での学生による授業評価では、毎年3.8～4.2点（5点満点）と比較的高い評価を受けているが、さらに学生の満足度の高い講義を行えるよう努めている。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>(1) 卒業研究生、大学院生の研究指導</p>	<p>2012年9月～現在</p>	<p>埼玉医科大学在職時には、保健医療学部健康医療科学科の卒業研究生に対して、「脂肪肝形成抑制効果を有する食品成分の探索」と「高脂肪食前後の臨床検査パラメーターの変動具合と生活習慣の関連性」などの研究テーマで、研究と卒業論文作成の指導を行った。</p> <p>福山大学では、研究室に配属される卒業研究生に対し、「フラボノイド類によるコレステロール吸収抑制機構」に関する研究テーマでの研究指導と卒業論文の作成指導を行なった。</p> <p>また、甲子園大学では、宝塚市の特産品となる商品開発や栄養学的基礎研究を主な研究テーマとし、研究室に配属される卒業研究生、大学院生に対する研究指導を行っている。</p>
<p>(2) ESS 部の研究・発表指導</p>	<p>2014年7月～9月</p>	<p>埼玉医科大学医学部 ESS 部が加盟している日本国際医学 ESS 学生連盟が主催する Basic Medical Conference 大会で研究発表を行うための実験指導とプレゼンテーション指導を受け持った。当該年度は、「内分泌・代謝」をテーマとした研究発表であったため、拘束ストレスモデルマウス</p>

様式第4号（教員個人に関する書類）

(3) 仙台みそ健康セミナー「みそでストレスに克つ!・・・仙台みそパワー」の講師	2014年10月	のHPA系の破綻をメインに動物実験と免疫組織染色を中心とした病理組織学的実験を中心とした研究の実施、研究成果の取りまとめと発表の指導を行った。 味噌摂取が慢性拘束ストレスによる脳機能低下に対し改善効果を有する研究成果を公表してきたところ、宮城県味噌醤油工業共同組合より大変興味を持っていただき、仙台で毎年開催している仙台みそ健康セミナーの講師としてこれまでの研究成果を含めた内容の講演を行った。
(4) NHK カルチャー講座の講師	2015年6月	味噌の摂取が慢性拘束ストレスによる脳機能低下に対し改善効果を有する研究成果について、NHK カルチャー講座 福島教室の講師としてこれまでの研究成果を含めた内容の講演を行った。
(5) ふくやま健康・食育市民会 喫煙・飲酒防止教育の講師	2015年10月 ～2020年3月	福山市保健所より依頼を受けて、市内公立小・中学校において喫煙・飲酒防止に関する講師として教育講演を行った。
(6) 甲子園大学公開講座の講師	2021年2月 2022年2月	甲子園大学公開講座にて、2021年は「味噌でストレス解消!」、2022年は「油断は禁物! 冬でも多い食中毒」のタイトルで講演を行った。
(7) 阪神シニアカレッジの講師	2021年6月	阪神シニアカレッジにて、「私たちの生活に身近な微生物～食中毒から発酵食品まで～」のタイトルで講演を行った。
5 その他 (1) タイのコンケン大学薬学部学生の実習指導	2015年9月 ～2020年3月	福山大学薬学部では、タイのコンケン大学薬学部の学生を日本での実務実習実施のために受入れており、学内での実習・演習として、血糖値測定、呼吸機能検査およびシミュレーターを使用した病態モデル患者へのフィジカルアセスメント演習の指導を担当した。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月	概要
1 資格, 免許 (1) 薬剤師免許	2000年6月	登録番号: 第353017号
(2) 指導薬剤師	2015年7月	薬学部実務実習における指導薬剤師の資格を取得した。
2 学校現場等での実務経験 (1) 立教大学との共同研究	2008年4月 ～2016年3月	立教大学理学部化学科の田淵眞理准教授との共同研究で、ナタデココの食物繊維を担体としたキャピラリー電気泳動法にて、高密度リポタンパク質(HDL)を従来よりも微量

様式第 4 号（教員個人に関する書類）

<p>(2) 早稲田大学との共同研究</p>	<p>2014 年 7 月 ～2017 年 3 月</p>	<p>で迅速に解析できる新規分析方法を確立した。現在までに文科省科研費（平成 23 年度挑戦的萌芽研究、平成 25 年度基盤研究 C、研究分担者）を拝受し、HDL 粒子の形態異常を引き起こす生活習慣因子（食生活、喫煙など）と脂質異常症発症との関連性の解析を行ってきた。</p> <p>早稲田大学先進理工学部化学・生命化学科の中尾洋一教授との共同研究で、魚や藻類など海産物や味噌などの発酵食品といった日本食に特徴的な食品成分が、エピジェネティクス制御に関与して生活習慣病や脳機能などに防御的作用を有するか否かを細胞レベルから動物レベルで実証実験を行った。平成 26 年度に農林水産省の革新的技術創造促進事業（異分野融合共同研究）「医学・栄養学との連携による日本食の評価」の補完研究に採択され、主に味噌に含まれるストレス緩和効果を有する生理活性成分を見出した。</p>
<p>3 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>(1) ミヤリサン製薬株式会社との共同研究</p> <p>(2) マルサンアイ株式会社との共同研究</p>	<p>2008 年 4 月 ～2013 年 3 月</p> <p>2014 年 9 月 ～2015 年 3 月</p>	<p>ミヤリサン製薬の主力製品で整腸剤として使用されている Clostridium butyricum MIYAIRI 588 菌（CBM588）と高脂肪食を同時に摂取させた際に、高脂肪食摂取による脂肪肝形成が CBM588 の同時摂取により顕著に改善することを見出し、その作用機構として CBM588 が腸管で産生する酪酸が肝臓での脂質代謝経路を正常に戻すにはたらく可能性を示唆する成績を得て、学術論文を公表した。</p> <p>マルサンアイ株式会社が開発した燃焼系アミノ酸を補充した機能性豆乳飲料 SOY BE UP の摂取により、過度な運動を負荷した動物において筋肉疲労（乳酸値やクレアチンキナーゼ値の上昇）や軽度な損傷（炎症性因子の上昇など）の改善効果の可能性を見出した。</p>
<p>4 その他</p> <p>(1) 平成 22 年度 厚生労働省 厚生科学審議会生活環境水道部会におけるトリクロロエチレンの基準値改正についての論文の引用</p>	<p>2010 年 6 月</p>	<p>これまで我が国の水道水の基準値としてトリクロロエチレンは 0.03mg/L で規制されていたのであるが、厚生労働省厚生科学審議会生活環境水道部会部会会議で 0.01mg/L とするように基準値が改正された際に、参考文献として博士論文を構成した学術論文が引用された。</p>

様式第4号 (教員個人に関する書類)

担当授業科目に関する研究業績等						
担当授業科目	著書、学術論文等の名称	単著 共著	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	執筆ページ数 (総ページ数)	概要
	(著書) 1. Determination of circulating native and denaturated HDL concentration s and its clinical implications. The HDL Handbook -Biological Functions and Clinical Implications-	共	2010年 8月	Academic Press.	261-275	野生型と酸化変性型のHDL濃度に関して、臨床検体でどの様に測定するか、またその測定値の意義に言及した内容の項を担当している。 【著者】 Nakano T, <u>Seo M</u> , Komoda T.
	(学術論文等) 1. Acarbose improves fibrinolytic activity in patients with impaired glucose tolerance.	共	2006年 6月	Metabolism	55 (7), 935-939	糖尿病治療薬であるアカルボース投与は、インスリン血症を改善することで耐糖能異常をきたした患者におけるプラスミノゲンアクチベーターインヒビター1を増加し、フィブリノーゲンを減少することで線溶系異常も改善できることを示した論文である。 【著者】 Shinoda Y, Inoue I, Nakano T, <u>Seo M</u> , Sassa M, Goto S, Awata T, Komoda T, Katayama S.
	2. Disruption of the murine intestinal alkaline phosphatase gene Akp3 impairs lipid transcytosis and induces visceral fat	共	2007年 5月	Am. J. Physiol . Gastrointest. Liver Physiol .	292 (5) , G1439-G1449	腸管のアルカリ性フォスファターゼ欠損マウスの表現型解析の一つとして、脂肪肝形成を伴う脂質異常症発症の検討を行った。コーン油を経口投与後の脂質パラメーターの動態が野生型と異なることを見出した。また高脂肪食負荷により、体重増加および脂肪肝形成が促進され、アルカリ性フォスファターゼ欠損が脂質代謝異常に關与することを示唆した論

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>accumulation and hepatic steatosis.</p>					<p>文である。 【著者】 Nakano T, Inoue I, Koyama I, Kanazawa K, Nakamura K, Narisawa S, Tanaka K, Akita M, Masuyama T, <u>Seo M</u>, Hokari S, Katayama S, Alpers DH, Millan JL, Komoda T.</p>
<p>3. Immunoreactive circulating oxidized HDL concentrations do not increase in patients undergoing carotid endarterectomy: a comparative study for oxidized HDL and oxidized LDL concentrations in plasma.</p>		<p>共</p>	<p>2007 年 6 月</p>	<p>Clin. Chim Acta</p>	<p>381(2), 179-181</p>	<p>頸動脈内膜切除の手術を受けた患者の血清中の酸化 HDL 濃度を ELISA 法により定量した。先行研究では、患者血清中の酸化 LDL 濃度は、有意な増加を示していたのであるが、今回測定した酸化 HDL 濃度は、増加していなかったことを示した論文である。 【著者】 Nakano T, <u>Seo M</u>, Komoda T, Kitazato KT, Uno M, Hamaoki M, Nagata A.</p>
<p>4. Enhancing effect of chlorinated organic solvents on histamine release and inflammatory mediator production.</p>		<p>共</p>	<p>2008 年 1 月</p>	<p>Toxicology</p>	<p>243(1-2), 75-83</p>	<p>環境汚染物質である有機塩素系溶剤の中で、肥満細胞からのヒスタミン遊離量を増加させる化合物として、トリクロロエチレンとテトラクロロエチレンを見出した。また、両化合物は、肥満細胞からの炎症性メディエーター産生量も増加させた。さらに、ラット受動皮膚アナフィラキシー反応も増強することを明らかにした。 【著者】 <u>Seo M</u>, Ikeda K, Okamura T, Kida K, Satoh M, Inagaki N, Nagai H, Nagase H.</p>
<p>5. 有機塩素系溶剤によるアレルギー反応</p>		<p>単</p>	<p>2008 年 3 月</p>	<p>岐阜薬科大学</p>		<p>環境汚染物質である有機塩素系溶剤の中でも、特に近年地下水汚染が深刻であるトリクロロエチレンおよび</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	増悪化に関する研究 (博士論文)					<p>テトラクロロエチレンの両化合物は、肥満細胞からのヒスタミン遊離量および炎症性サイトカイン産生量を <i>in vitro</i> および <i>in vivo</i> において増強させることを見出した。また、トリクロロエチレンおよびテトラクロロエチレンの両化合物は、我が国における水道水中の基準値程度の低濃度であっても長期間飲水摂取することによって、アレルギー反応の増悪化、免疫担当器官の異常が引き起こされた。トリクロロエチレンおよびテトラクロロエチレンは、アレルギー反応においてアジュバント様作用を有しており、症状の増悪化の引き金となりうることを実証した。</p> <p>【著者】瀬尾誠</p>
6. Effect of aspirin on chromosome aberration and DNA damage induced by X-ray in mice.	共	2008 年 7 月	Radiation Effects and Defects on Solids	163, 655-660	<p>0.5 グレイの X 線照射を行った後、小核試験およびコメットアッセイなどにより遺伝子損傷が、アスピリンの投与により用量依存的に遺伝子損傷抑制効果を示したことを明らかにした論文である。</p> <p>【著者】Niikawa M, Chuuriki K, Shibuya K, Seo M, Nagase H.</p>	
7. A small amount of tetrachloroethylene ingestion from drinking water accelerates antigen-stimulated allergic responses.	共	2008 年 8 月	Immunobiology	213(8), 663-669	<p>ラットに日本の水道水基準値程度の低濃度テトラクロロエチレンを飲水摂取させると、I 型アレルギー反応が増強した。この増強作用には、皮膚組織中の肥満細胞と炎症性細胞の浸潤の増加、さらに局所リンパ節での炎症性病変が関与することを明らかにした論文である。</p> <p>【著者】Seo M, Yamagiwa T, Kobayashi R, Ikeda K, Satoh M, Inagaki N, Nagai H, Nagase H.</p>	
8. Augmentation of antigen-stimulated allergic responses by a	共	2008 年 11 月	Regul. Toxicol. Pharmacol.	52(2), 140-146	<p>ラットに日本の水道水基準値程度の低濃度トリクロロエチレンを飲水摂取させると、I 型アレルギー反応が増強した。この増強作用には、皮膚組織中の肥満細胞と炎症性細胞の浸潤の増加、さらに局所リンパ節での</p>	

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>small amount of trichloroethylene ingestion from drinking water.</p>					<p>炎症性病変が関与することを明らかにした。さらに血清中総 IgE 濃度や炎症性サイトカイン濃度も増加したことを示した論文である。 【著者】 Seo M, Yamagiwa T, Kobayashi R, Ikeda K, Satoh M, Inagaki N, Nagai H, Nagase H.</p>
	<p>9. Statins activate human PPAR α promoter and increase PPAR α mRNA expression and activation in HepG2 cells.</p>	<p>共</p>	<p>2008 年 12 月</p>	<p>PPAR Res.</p>	<p>2008, article ID 316306 (11 pages)</p>	<p>高脂血症治療薬であるスタチンの多面的効果を検証した研究で、ヒト PPAR α の発現から活性化までの一連の流れにおいて、スタチンがどこに関与するかを検証した。結果、大部分のスタチンが、核内転写因子である HNF4 α 産生を増加させて PPAR α プロモーター活性化を促進し、PPAR α mRNA 発現およびタンパク質発現を亢進させることを示した。また PPRE を介した転写活性を増加させることを実証した論文である。 【著者】 Seo M, Inoue I, Ikeda M, Nakano T, Takahashi S, Katayama S, Komoda T.</p>
	<p>10. Rapid and simple profiling of lipoproteins by polyacrylamide-gel disc electrophoresis to determine the heterogeneity of low-density lipoproteins (LDLs) including small dense LDL.</p>	<p>共</p>	<p>2009 年 1 月</p>	<p>Recent Pat. Cardiovasc. Drug Discov.</p>	<p>4(1), 31-36</p>	<p>ポリアクリルアミドディスクゲルによる等電点電気泳動法 (Lipophor) にて、LDL だけでなくスモールデンズ LDL の分離も可能であることを実証し、リポタンパク質プロファイルの迅速かつ簡便な解析方法として証明した論文である。 【著者】 Nakano T, Inoue I, Seo M, Takahashi S, Awata T, Komoda T, Katayama S.</p>
	<p>11. Acarbose attenuates postprandial</p>	<p>共</p>	<p>2009 年 5 月</p>	<p>Metabolism</p>	<p>58(5), 583-585</p>	<p>糖尿病治療薬であるアカルボースが、脂質吸収の抑制にも関する可能性があるか否かを Caco-2 細胞を用</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

hyperlipidemi a: Investigation in an intestinal absorptive cell model.						いた腸管上皮細胞モデルによる透過性実験を行った結果、トリグリセリドリッチなりポタンパク質の分泌には、ほとんど影響しなかったことを報告した論文である。 【著者】 Nakano T, Inoue I, <u>Seo M</u> , Takahashi S, Awata T, Komoda T, Katayama S.
12. Lysophosphatidylcholine for efficient intestinal lipid absorption and lipoprotein secretion in caco-2 cells.	共	2009 年 9 月	J. Clin. Biochem . Nutr.	45(2), 227-23 4	ホスファチジルコリンおよびホスホリパーゼ A2 により加水分解されたホスファチジルコリン分解物は、本質的に腸管の脂質吸収プロセスに関与していることを確認し、そのホスファチジルコリンおよびその加水分解が脂質吸収効率だけでなく、リポタンパク質産生および代謝にも関連していることを示した論文である。 【著者】 Nakano T, Inoue I, Katayama S, <u>Seo M</u> , Takahashi S, Hokari S, Shinozaki R, Hatayama K, Komoda T.	
13. A possible role of lysophospholipids produced by calcium-independent phospholipase A(2) in membrane-raft budding and fission.	共	2009 年 10 月	Biochim . Biophys . Acta	1788(1 0), 2222-2 228	ホスホリパーゼ A2 によって産生されるリゾリン脂質が、ウイルスの出芽を支援する因子である細胞膜ラフト関連形質膜粒子形成に利用されていることを明らかにした。すなわち、ホスホリパーゼ A2 は、膜ダイナミズムにおける調節機構に関与している可能性を示唆することを示した論文である。 【著者】 Nakano T, Inoue I, Shinozaki R, Matsui M, Akatsuka T, Takahashi S, Tanaka K, Akita M, <u>Seo M</u> , Hokari S, Katayama S, Komoda T.	
14. Activating effect of momordin, extract of Bitter Melon (Momordica Charantia L.), on the promoter of	共	2009 年 12 月	J. Atheros cler. Thromb.	16(6), 888-89 2	苦瓜抽出成分であるモモルジンが、ヒト PPAR δ のプロモーター活性を介して、PPAR δ mRNA 発現を亢進することを示した論文である。 【著者】 Sasa M, Inoue I, Shinoda Y, Takahashi S, <u>Seo M</u> , Komoda T, Awata T, Katayama S.	

様式第4号 (教員個人に関する書類)

human PPAR δ .						
15. Direct and simple fluorescence detection method for oxidized lipoproteins.	共	2010年 1月	Anal. Chem.	82(3), 1128-1 132	酸化変性したリポタンパク質 (主に LDL と HDL) をそれぞれ特異的に蛍光標識して、直接的に簡易測定できる方法を確立したことを報告した論文である。 【著者】 Ikeda T, <u>Seo M</u> , Inoue I, Katayama S, Matsunaga T, Hara A, Komoda T, Tabuchi M.	
16. A promoter in the novel exon of hPPAR γ directs the circadian expression of PPAR γ .	共	2010年 2月	J. Atheroscler. Thromb.	17(1), 73-83	ヒト PPAR γ の新規プロモーター領域を発見し、そのプロモーター活性がサーカディアンリズムによって制御され、PPAR γ 遺伝子の発現調節が行われていることを明らかにした。また、サーカディアンリズムの発振に関与する主要な転写因子として、PAR-bZIP ファミリーおよび E4BP4 が関与していることを示した論文である。 【著者】 Takahashi S, Inoue I, Nakajima Y, <u>Seo M</u> , Nakano T, Yang F, Kumagai M, Komoda T, Awata T, Ikeda M, Katayama S.	
17. Enhancement of immediate allergic reactions by trichloroethylene ingestion via drinking water in mice.	共	2010年 10月	J. Toxicol. . Sci.	35(5), 699-70 7	トリクロロエチレンを飲水摂取させたマウスを用いて、獲得免疫の点から即時型アレルギー反応の増強作用があるかを検証した。結果、トリクロロエチレンは能動感作による受動皮膚アナフィラキシー反応を増強するとともに、炎症性サイトカイン産生も増加させた。さらに抗原刺激した T 細胞の H3-チミジン取り込みが増加することを示した論文である。 【著者】 Kobayashi R, Ikemoto T, <u>Seo M</u> , Satoh M, Inagaki N, Nagai H, Nagase H.	
18. Geometrical separation method for lipoproteins	共	2011年 2月	Anal. Chem.	83(3), 1131-1 136	血清中リポタンパク質プロファイル分析に関して、ナタデココ由来の食物繊維を担体としたキャピラリー電気泳動法による新規分析方法を確立した論文である。さらに走査ブロー	

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

	<p>using bioformulated -fiber matrix electrophoresis: Size of high-density lipoprotein dose not reflect its density.</p>					<p>ブ顕微鏡により、高密度リポタンパク質 (HDL) の形態観察を詳細に行い、HDL の形態に依存した分析がなされていることを証明した論文である。</p> <p>【著者】Tabuchi M, <u>Seo M</u>, Inoue T, Ikeda T, Kogure A, Inoue I, Katayama S, Matsunaga T, Hara A, Komoda T.</p>
	<p>19. Enhancing effects of trichloroethylene and tetrachloroethylene on type I allergic responses in mice.</p>	共	2012 年 4 月	J. Toxicol . Sci.	37(2), 439-445	<p>これまでラットで行ってきたトリクロロエチレンおよびテトラクロロエチレンによるアレルギー反応増悪化反応について、種を変えてマウスを用いて行った。結果、ラットと同様に肥満細胞からのヒスタミン遊離量の増加、受動皮膚アナフィラキシー (PCA) 反応の増強が認められた。さらに、両化合物の低濃度飲水投与後の PCA 反応の増強も認められたことを報告した論文である。</p> <p>【著者】<u>Seo M</u>, Kobayashi R, Okamura T, Ikeda K, Satoh M, Inagaki N, Nagai H, Nagase H.</p>
	<p>20. <i>Clostridium butyricum</i> MIYAIRI 588 improves high-fat diet-induced non-alcoholic fatty liver disease in rats.</p>	共	2013 年 12 月	Dig. Dis. Sci.	58(12), 3534-3544	<p>整腸剤として用いられている酪酸菌を高脂肪食負荷と同時にラットに摂取させたところ、血清中脂質パラメーターの改善および脂肪肝形成改善効果が認められる知見を得た。その作用機構として、肝臓でのコレステロールから胆汁酸への変換の亢進 (CYP7A1, CYP8B1 および胆汁酸排泄トランスポーターの mRNA 発現亢進) により過剰な胆汁酸は、腸管循環にまわらず糞便中に排泄される経路が活性化していることが示唆される成績を得た。</p> <p>【著者】<u>Seo M</u>, Inoue I, Tanaka M, Matsuda N, Nakano T, Awata T, Katayama S, Alpers DH, Komoda T.</p>
	<p>21. レスキュー薬の管理方</p>	共	2016 年 8 月	医療薬学	48(8), 569-57	<p>オピオイド治療中の入院患者を、自己管理患者 (SMP) と看護管理患者</p>

	<p>法の違いが及ぼすオピオイドの服用状況への影響</p>				<p>5</p>	<p>(NMP) の 2 グループに分け、オピオイド経口投与服用量 (RD) 管理法の違いがオピオイド使用にどのように影響するかを調べた。RD 患者の割合、総使用数、SMP 群と NMP 群間のオピオイド用量には、有意差はなかった。NMP は、昼間 (午前 9 時～午後 9 時) と夜間 (午後 9 時～午前 9 時) に RD の総使用数に有意な差を示したが、SMP は有意差を示さなかった。さらに、SMP の昼間と夜間 B (午前 1 時～午前 5 時) の RD 使用者の割合に有意差はなかったが、NMP の日中の使用割合は、夜間時間 B の使用割合よりも低かった。NMP は夜間に RD のナースコールボタンを押すことを躊躇したのではないかと考えられた。</p> <p>【著者】岡田昌浩、杉原弘記、岡本伸也、村上史承、渡辺陽子、上塚大一、竹井英介、瀬尾誠、杉原成美</p>
	<p>22. Effects of catechins and their related compounds on cellular accumulation and efflux transport of mitoxantrone in Caco-2 cell monolayers.</p>	<p>共</p>	<p>2017 年 5 月</p>	<p>J. Food Sci.</p>	<p>82(5), 1224-1230</p>	<p>カテキン類が抗がん剤であるミトキサントロンの腸管吸収並びに細胞内蓄積に対して排出系トランスポーターである BCRP の機能を抑制することを見出した。カテキン類はミトキサントロンの用量の減量に貢献することを示唆した論文である。</p> <p>【著者】 Sugihara N, Kuroda N, Watanabe F, Choshi T, Kamishikiryo J, <u>Seo M</u></p>
	<p>23. Analysis of lipid raft molecules in living brain slices.</p>	<p>共</p>	<p>2018 年 10 月</p>	<p>Neurochem. Int.</p>	<p>119, 140-150</p>	<p>ラットの脳スライスを用いて細胞膜のラフト上に存在する受容体などのタンパク質間相互作用を網羅的に解析する実験手法を初めて報告した論文である。本報告ではコレラ毒素を作用させた際に実際にタンパク質間相互作用がある因子を、質量分析機器を用いて解析した。</p> <p>【著者】 Kotani N, Nakano T, Ida Y, Ito R, Hashizume M, Yamaguchi A, <u>Seo M</u>, Araki T, Hojo Y, Honke K,</p>

様式第 4 号 (教員個人に関する書類)

(教育実践記録等) 総説 1. 有機塩素系溶剤によるアレルギー反応増悪化に関する研究 2. Immunotoxic effects of trichloroethylene and tetrachloroethylene. 3. トリクロロエチレンによるアレルギー反応増悪化に関する研究 報告書 1. 雑豆抽出物による脂肪肝形成抑制作用および脂質ホメオスタシス改善作用の検討 2. ヒト初代培養肝細胞を用いた <i>in vitro</i> 脂肪肝形成モデルにおける大豆抽出物の品種における改善効果の差異 3. 慢性拘束ストレス負荷に	共	2009 年 6 月	岐 阜 薬 科 大 学 紀 要	58, 9-18	Murakoshi T. 博士論文の内容を基にした有機塩素系溶剤によるアレルギー反応増悪化に関する研究の総説論文である。 【著者】瀬尾誠, 永瀬久光
	共	2011 年 12 月	J. Health Sci.	57(6), 488-496	トリクロロエチレンおよびテトラクロロエチレンによる免疫毒性学的研究に関する総説論文である。 【著者】Seo M, Kobayashi R, Nagase H.
	共	2016 年 3 月	福 山 大 学 薬 学 部 研 究 年 報	38, 4-11	有機塩素系溶剤であるトリクロロエチレンによるアレルギー反応増悪化に関する研究の総説論文である。 【著者】瀬尾誠
	単	2009 年 12 月	豆 類 時 報	56, 78	一般社団法人日本豆類基金協会より平成 21 年度雑豆需要促進研究情報収集事業にて採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】瀬尾誠
	単	2012 年 3 月	大 豆 た ん 白 質 研 究	14, 139-145	公益財団法人不二たん白質研究振興財団より平成 22 年度研究助成(若手枠)にて採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】瀬尾誠
	共	2014 年 3 月	中 央 味 噌 研 究	35, 119-12	一般社団法人中央味噌研究所より平成 24 年度研究助成にて採択された

様式第4号（教員個人に関する書類）

よる海馬機能低下に対する味噌摂取による改善効果				所 研 究 報 告	8	研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】瀬尾誠、村越隆之
4. 慢性拘束ストレスによる脳機能低下を改善する味噌中の生理活性ペプチドの探索	共	2015年 3月	中央味噌研究所研究報告	36, 65-72		一般社団法人中央味噌研究所より平成25年度研究助成にて採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】瀬尾誠、荒木智之、村越隆之
5. <i>in vitro</i> ストレス環境下における神経幹細胞の生存および増殖・分化障害に対する味噌による改善効果の検証	共	2017年 3月	中央味噌研究所研究報告	38, 77-81		一般社団法人中央味噌研究所より平成26年度研究助成にて採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】瀬尾誠、荒木智之、村越隆之
6. みそ汁の摂取による酸化ストレスの低下とそれに伴う胃癌リスクの低減	共	2017年 3月	中央味噌研究所研究報告	38, 84-88		一般社団法人中央味噌研究所より平成27年度研究助成にて研究代表者の荒木智之が採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】荒木智之、瀬尾誠
7. 胃がんリスクファクターである活性酸素種とピロリ菌に対する味噌抽出成分の効果	共	2018年 3月	中央味噌研究所研究報告	39, 44-48		一般社団法人中央味噌研究所より平成28年度研究助成にて研究代表者の荒木智之が採択された研究成果をまとめた研究報告である。 【著者】荒木智之、瀬尾誠
8. ダリア花卉から採取した天然酵母を用いたパンの開発	単	2023年 1月				令和4年度宝塚市ダリア生産拡大推進事業補助金（特産品開発支援）を拝受し、ダリアから分離した天然酵母を用いたパンを作成し、商品化への土台作りの研究を行った報告書である。 【著者】瀬尾誠